

「東京大学稷門賞」受賞式を挙行



東京大学稷門賞受賞者

(2 ページに関連記事)

目次

一般ニュース	2
総長の海外出張、評議会（10月21日(火)）承認事項・報告事項、「東京大学稷門賞」授賞式を挙行、2003年度東京大学・UBC 学生交流事業が行われる	
部局ニュース	4
平成16(2004)年度大学院法学政治学研究科修士課程入学試験について、東京直下型地震を想定した防災訓練・講演会を実施、農場開場125周年記念シンポジウム・祝賀会開催される、医科学研究所で慰霊祭行われる、柏キャンパス一般公開開催される、物性研究所一般講演会開催される、海洋研究所「大槌センター30周年」記念講演会及び祝賀会開催される、第77回国立7大学附属図書館協議会開催される、「シーボルトの21世紀」展関連講演会の開催について、平	

成15年度総合研究博物館公開講座「シーボルトの21世紀」開催される	
掲示板	9
東京大学/ILOノーベル平和賞社会政策シンポジウム、「教養学部報」第469（11月5日）号の発行、教養学部美術博物館のお知らせ 色の音楽 手の幸福—ロラン・バルトのデッサン展—、教養学部で第99回オルガン演奏会の開催、新領域創成科学研究科にトランスレーショナル研究の拠点誕生、前近代日本の史料遺産プロジェクト 第4回公開研究集会、平成15年度第4回バイオシーズ・マッチング会/第19回分生研バイオテクノロジー懇談会、教育用計算機システムの更新について	
広報委員会（東京大学の法人化に関するQ&A）	13
事務連絡（人事異動（教官、事務官））	14
訃報（芦原義信名誉教授、菊地正幸教授）	15
淡青評論「“淡青”から考えたこと」	16

≡ 一般ニュース ≡

総長の海外出張

平成15年11月12日（水）～平成15年11月14日（金）
国立台湾大学創立75周年記念式典出席のため、台湾へ出張する。

評議会（10月21日（火））承認事項

東京大学学部通則の一部改正

平成15年9月19日付けの学校教育法施行規則（昭和22年文部省令第11号）の一部改正に伴い、「大学において、個別の入学資格審査により、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者で、18歳に達したもの」に入学資格を認めることができることになったこと等に
に伴い、所要の改正が行われた。

附 則

この規則は、平成15年10月21日から施行し、改正後の東京大学学部通則の規定は、平成15年9月19日から適用する。

東京大学21世紀COEプログラム推進室規則及び東京大学21世紀COEプログラム推進室運営委員会規則の制定

東京大学における21世紀COEプログラムに関し、より一層の研究拠点事業を促し、東京大学全体の事業の活性化を図るため、「東京大学21世紀COEプログラム推進室規則」及び「東京大学21世紀COEプログラム推進室運営委員会規則」が制定された。

東京大学21世紀COEプログラム推進室規則

（設置）

第1条 総長室の下に、21世紀COEプログラム推進室（以下「推進室」という。）を設置する。

（目的）

第2条 推進室は、東京大学における21世紀COEプログラム（以下「プログラム」という。）に関し、より一層の研究拠点事業を促し、東京大学全体の事業の活性化を図るため、次の各号に掲げる業務を行うことを目的とする。

- (1) プログラム全体の総合的推進
- (2) プログラムの進捗状況の把握
- (3) プログラムの広報
- (4) プログラムの運営、評価等業務の支援
- (5) その他プログラムに関し必要と認める事項

（室長）

第3条 推進室に室長を置く。

2 室長は、総長が指名する副学長をもって充てる。

3 室長は、推進室の業務を総括する。

（室員）

第4条 推進室に、室員若干名を置く。

室員は、次の各号に掲げる者とする。

- (1) 東京大学の教職員のうちから、室長の指名に基づき、総長が委嘱した者
- (2) その他第2条に規定する業務を行うため、室長が特に必要と認めた者

（運営委員会）

第5条 推進室に、推進室の管理運営に関する重要事項を審議するため、運営委員会を置く。

2 運営委員会の組織及び運営に関しては、別に定める。

（事務）

第6条 推進室の事務は、研究協力部研究協力課において処理する。

（補則）

第7条 この規則に定めるもののほか、推進室の管理運営に関し必要な事項は、室長が別に定める。

附 則

この規則は、平成15年10月21日から施行する。

東京大学21世紀COEプログラム推進室運営委員会規則

（設置）

第1条 東京大学21世紀COEプログラム推進室（以下「推進室」という。）に、運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（任務）

第2条 委員会は、推進室の管理運営に関する重要事項を審議する。

（組織）

第3条 委員会は、委員長及び委員をもって組織する。

（委員長）

第4条 委員長は、推進室長をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

（委員）

第5条 委員は、次に掲げる者に総長が委嘱する。

- (1) 本学の教授 若干名
- (2) 事務局長
- (3) 研究協力部長
- (4) その他総長が必要と認めた本学教職員

（任期）

第6条 前条第1号及び第4号の委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

2 補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

（議事）

第7条 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、会

議を開き議決することができない。

- 2 委員会の議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。
(小委員会)

第8条 委員会は、必要に応じて小委員会を置くことができる。

(補則)

第9条 この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会の定めるところによる。

附 則

この規則は、平成15年10月21日から施行する。

式典（大学院入学式等）日程

- ・平成15年度卒業式
平成16年3月25日（木）から平成16年3月26日（金）に変更
- ・平成15年度学位記授与式
平成16年3月26日（金）から平成16年3月25日（木）に変更
- ・平成16年度大学院入学式
平成16年4月5日（月）午前（大講堂）
- ・平成16年度入学式
平成16年4月12日（月）午前（日本武道館）

評議会（10月21日(火)）報告事項

大学間学術交流協定

- ・東京大学と欧州原子核研究機構（CERN）との間における学術交流に関する大学間協定の更新

「東京大学稷門賞」授賞式を挙行政

10月27日（月）16時30分から弥生講堂一条ホールにおいて標記授賞式が挙行政され、昨年度から新設された「東京大学稷門賞」が、佐々木総長から各受賞者の方々へ授与された。

本表彰は、私財の寄付、ボランティア活動及び援助等により、本学の活動の発展に大きく貢献した個人、法人又は団体、寄附講座、寄附研究部門に対し授与するものである（現に在籍する本学の教職員及び学生を除く）。

授賞式は岡田研究協力部長の司会により、青柳正規功績者選考委員会委員長の授賞選考経過報告、佐々木総長から各受賞代表者へ賞状及び記念品の贈呈、総長から感謝のことば、各受賞者からの挨拶が行われた。

なお、この日総長、副学長及び各部局長は式服を着用し、厳粛な雰囲気の中、授賞式は終了した。

また、同講堂会議室で開催されたレセプションでは、

渡辺副学長の挨拶の後、受賞関係者と本学関係者と和やかな雰囲気の中、懇談が行われた。

当該顕彰については、年2回行うこととしている。

◎ 受賞者一覧

1 三木米子 殿

授賞理由：ご子息（農学生命科学研究科修士課程修了その後受託研究員）の不慮の事故死後に寄附。それを「三木正司奨学基金」として農学部学生へ奨学金を支給（給与）。

2 文京区国際協会

会長 林 有厚 殿

授賞理由：文京区居住に限らず、本学留学生との交流・支援活動を展開。

3 財団法人学術振興野村基金

理事長 氏家 純一 殿

授賞理由：法学政治学研究科附属比較法政国際センターに「国際資本市場法寄附研究部門」を設置。これ以前・以降も寄附を継続。

4 武田薬品工業株式会社

代表取締役社長 長谷川 閑史 殿

授賞理由：薬学系研究科に「創薬理論科学寄附講座」を設置。創薬科学の拠点として実現（21世紀COE「戦略的基礎創薬科学」）。



佐々木総長の挨拶

2003年度東京大学・UBC学生交流事業が行われる

去る9月26日（金）から10月5日（日）にかけて、2003年度東京大学・UBC学生交流事業がカナダ・バンクーバーにおいて行われた。

この事業は1978年に締結された東京大学とブリティッシュ・コロンビア大学（UBC）との間の学生交流協定に基づき、東京大学運動会漕艇部に所属する学生が中心となってUBCとのスポーツ交流・文化交流を図っているもので、1998年から始まり今年で5回目（2001年度は

同時多発テロの影響で中止) を数える。

今回の交流派遣メンバーは漕艇部OBの荒川団長並びに北原漕艇部長、監督、コーチを含め総勢18名で、オリンピック級の選手もいるというUBCボート部と合同しての迫力のある漕艇練習と、彼らと競う親善レースが催された。この北米の強豪校の実際のトレーニングと、そこで活躍する選手らとの出会いは学生たちにとってはまたとない貴重な機会であった。また、漕艇部の学生14名は文化交流の一環として、UBCで行われている地理学及び日本語クラスの授業に参加し、お互いにプレゼンテーション及びディスカッションを行った。地理学は全て英語で行われ、内容もレベルの高いものであり、日本語クラスも、バンクーバーで日本語を学ぶ向学心あふれる現地学生と語り合えるクラスで、大変に魅力的かつ刺激的な行事であった。中には、授業終了後も特に親しくなったUBCの学生とさらに交流を深めるといった場面も見られた。

本交流事業は、東京大学とUBCの学生が10日間という短い期間であるが、スポーツ・合同事業・パーティーなどを通じて、お互いに異文化に触れ、草の根レベルでの真の相互理解を深める絶好の機会となっており、回数を重ねるごとに充実した事業になっている。UBC側との理解も年々深まっており、東京大学運動会漕艇部は今後もぜひ続けていきたいとしている。



漕艇練習の様子



日本語クラスの講義でプレゼンテーションをする本学の学生

(学生部)

≡ 部局ニュース ≡

平成16(2004)年度大学院法学政治学研究科修士課程入学試験について

平成16(2004)年度大学院法学政治学研究科修士課程(A選抜・C選抜)の入学試験は、9月24日(水)～9月26日(金)に筆記試験が、10月15日(水)～10月17日(金)に口述試験がそれぞれ行なわれ、10月24日(金)に合格者(入学許可内定者)が発表された。

なお、志願者数、受験者数及び合格者数は以下のとおりである。

選抜の種類		A	C	計
志願者数	本学出身者	34	1	35
	他大学出身者	110	37	147
	計	144	38	182
受験者数	本学出身者	28	1	29
	他大学出身者	78	32	110
	計	106	33	139
合格者数	本学出身者	9		9
	他大学出身者	2	10	12
	計	11	10	21

A：筆記試験(外国語1科目、専門科目2科目)、口述試験、学業成績により選抜。

B：司法試験合格者を対象とする。筆記試験(外国語1科目)、口述試験、小論文、学業成績により選抜。合格発表は12月19日(金)

C：外国人特別選抜。筆記試験(外国語1科目、専門科目1科目)、口述試験、学業成績等により選抜。

(大学院法学政治学研究科・法学部)

東京直下型地震を想定した防災訓練・講演会を実施

医学部附属病院(永井良三病院長)は、10月24日(金)16時から入院棟A1階正面玄関で約250名の教職員が参加して、トリアージ訓練(被災患者受入訓練)を実施した。

訓練は、東京東部において直下型地震が発生。マグニチュード7、震度6強の激震により、多数の死傷者が東大病院に運ばれるという想定の下に行われた。

館内では、看護師が非常階段を使用した避難誘導体感訓練を行った。館外では、独歩の被災患者や救急隊員が

運び込む被災患者が続々と到着。トリアージ指揮者による重症、中等症、軽症、死亡の判定とトリアージタグの記入、エリア別搬送を行った。搬送後は、トリアージタグを集計、災害対策本部へ集計表を提出して訓練を終了した。

その後、文京区総務部防災課坂本主査の防災講演会が行われ、18時過ぎに終了した。



訓練の様子

(医学部附属病院)

農場開場125周年記念シンポジウム・祝賀会開催される

農学生命科学研究科附属農場は、1878（明治11）年に農学部の前身である駒場野の農学校に設置された学内農場に起源を求めることができ、今年で開場125周年を迎え、その記念シンポジウムと祝賀会が10月21日（火）に弥生講堂で開催された。

記念シンポジウムでは、坂農場長、會田研究科長の挨拶に引き続き、クイーンズランド大学・Shu Fukai教授、タイ王国農業省ウボン稲研究所・Poonsak Mekwatanakarn副所長、国際稲研究所ウボン事務所・Boonrat Jongdee研究員をお招きし各々20分間の特別講演、農学生命科学研究科・武内和彦副学部長、全国大学附属農場協議会・三枝正彦会長、鳥取大学乾燥地研究センター・稲永忍センター長、農業・生物系特定産業技術研究機構果樹研究所・梶浦一郎所長、日本大学・石井龍一教授による各々30分間の基調講演、及び「新しいフィールド農学を目指して」をメインテーマにパネルディスカッションが約1時間にわたって農場・森田茂紀教授のオーガナイザによって行われ、既に検見川キャンパスへの移転が決定している農場の将来像が浮かび上がる有意義な講演と議論が多面的に展開された。

シンポジウム後に開催された記念祝賀会では、坂農場長、鈴木副学部長の挨拶に引き続き、全国大学附属農場協議会・塩谷哲夫前会長からご祝辞を頂戴し、山崎耕宇元農場長の乾杯の発声後、多数のOBを含めた農場と農

学生命科学研究科の関係者が歓談し、農場の人的・物的歴史を懐古しながらひと時の旧交を温めあった。

会場ではこれと同時に、農場所蔵貴重書物展示会と、農場に本拠を置く研究室在籍学生を中心としたポスター研究発表会が開催され、新旧の教育研究に関心深げに見入る方々の姿のコントラストが印象的であった。



坂農場長による開会の挨拶



パネルディスカッションの様子

(大学院農学生命科学研究科附属農場)



医科学研究所で慰霊祭行われる

医科学研究所では、同附属病院で亡くなられ、病理解剖させていただいた方々の御霊をお慰めするために、10月9日（木）13時30分から医科学研究所慰霊祭を挙行了。式は、参列者全員による黙祷に始まり、献体者御尊名の奉読の後、山本所長が「御霊に捧げることば」を述べた。続いて、御遺族及び医科学研究所教職員が献花を行い、最後に、岩本病院長から御遺族に対して感謝のことばがあり、14時過ぎに滞りなく終了した。



「御霊に捧げることば」を述べる山本所長



遺族に感謝の挨拶を述べる岩本病院長

(医科学研究所)

柏キャンパス一般公開開催される

10月31日（金）、11月1日（土）の両日にわたり柏キャンパス（宇宙線研究所、物性研究所、新領域創成科学研究科基盤科学研究系・先端生命研究系、環境安全研究センター柏支所）において、一般公開が開催された。

この一般公開は、「地域・社会との連携・交流」や「知的啓発」を目指して、宇宙線研究所、物性研究所が柏キャンパスへ移転した当初から実施されてきたもので、今年で4回目となる。

公開内容は、各部署とも、日頃の研究成果の紹介、実験体験コーナー、特別企画及び講演会等それぞれ特色ある催しが行われた。



実験体験を楽しむ中学生

特に、物性研究所と新領域創成科学研究科基盤科学研究系で行われた「ガイドツアー」（スタッフによる見どころ案内）は、毎回、多数の参加者があり好評であった。

両日とも、家族連れが目立ったが、特に、1日目は、学校行事として高校生約80名が貸切バスで訪れ、2日目は理科教育の一環として訪れた中学生約200名等、千葉県内のみならず、近県からも中・高校生が多数訪れ、熱心にメモを取るなど、さながら課外授業のような雰囲気であった。



団体で訪れた中学生たち

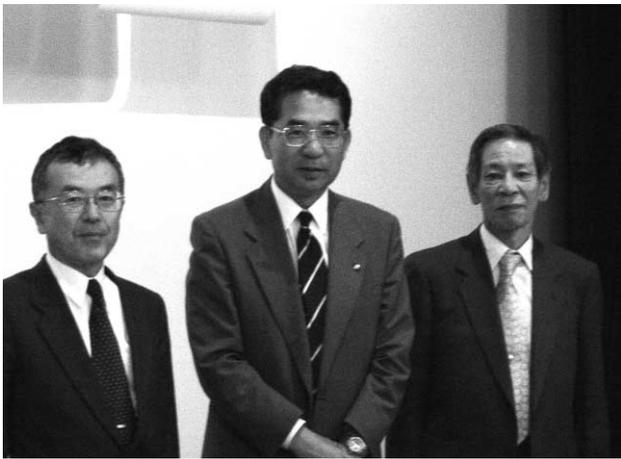
今年の一一般公開は、まずまずの天気にも恵まれたこともあり、2日間を通して、4,000名を超える方々が訪れ、中でも自転車での来場者が多く見られたことは、地域に開かれたキャンパスとしての雰囲気が感じられた。

来場者は、大学院生による先端研究の丁寧な説明や、展示、実験体験等を通じ、より東大柏キャンパスに親しみを持って帰られた。

(柏地区事務部)

物性研究所一般講演会開催される

物性研究所では去る10月11日（土）13時から、千葉県柏市・柏市教育委員会との共催でアミューゼ柏において、木下實東京大学名誉教授（2003年日本学士院賞受賞）、福山秀敏東北大学金属材料研究所教授（前物性研究所長、2003年紫綬褒章受章）の両氏による「一般講演会」を開催した。講演会では、最近の研究成果を踏まえて、物質科学の法則性や有機化合物で磁石をつくることなど、具体的な事例を交えて話され、講演後、聴講者との活発な質疑応答などが行われた。当日は、3連休の初日にもかかわらず、物質科学の最前線についての講演ということもあり、約120名が聴講する講演会となった。



左から福山東北大学教授（前物性研究所長）、本多柏市長、木下名誉教授

（物性研究所）

海洋研究所「大槌センター30周年」記念講演会及び祝賀会開催される

海洋研究所では、附属大槌臨海研究センター創立30周年・附属国際沿岸海洋研究センターの創立を記念して10月24日（金）岩手県上閉伊郡大槌町の大槌町城山公園体育館及び同中央公民館において記念講演会及び祝賀会を行った。

記念講演では、大学院理学系研究科附属臨海実験所長の森澤正昭教授、元大槌臨海研究センター長の沼知健一教授よりそれぞれ「大槌でのシロザケとホヤを使った精子運動機構の研究」「大槌臨海研究センター設立の経緯と基礎的的海洋研究の意義」と題して行われ、会場には地元の大槌高校の生徒をはじめ200名ほどが興味深く聞き入っていた。

祝賀会では、地元関係者、大学関係者、センターOB職員、海洋研究所職員、研究船関係者ら約100名が参加し、小池海洋研究所長の挨拶に始まり、高橋岩手県副知事、山崎大槌町長、藤原文部科学省研究振興局学術機関課長（藤澤附置研究所係長代読）より祝辞があった。



記念講演を行う元大槌臨海研究センター長の沼知教授



祝賀会で挨拶する小池所長

引き続き、小池所長から、センターの発展に多大な尽力をいただいた大槌町、岩手県水産技術センター、釜石海上保安部、大槌町漁業協同組合、釜石東部漁業協同組合に対して感謝状の贈呈の後、猪内岩手大学副学長の発声により乾杯を行った。歓談後児玉北里大学水産学部長、不破国際連合大学学術顧問、平 日本学術振興会監事から祝辞が述べられた。

なお、当日はセンター及び大槌港に寄港した研究船淡青丸の一般公開も行われ、平日にもかかわらず小中学生等多くの見学者で賑わった。

（海洋研究所）

第77回国立7大学附属図書館協議会開催される

去る10月3日（金）に、附属図書館において、国立7大学図書館協議会が開催された。これは、北海道大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学の附属図書館の館長、部課長が一同に会して、7大学が共通して当面する図書館運営、サービスに関わる諸問題について話し合うもので、今年で77回目を迎えた。

当日は、13時から14時半まで、附属図書館長会議と部

課長会議が並行して行われた後、15時から、文部科学省研究振興局情報課より、三浦情報課長、當間学術基盤整備室長、高比良情報研究推進専門官、佐藤大学図書館係長をお迎えして、附属図書館大会議室に場所を移して、本協議会を行った。

協議会では、三浦情報課長から文部科学省所管事項についての説明があった後、当番校である東京大学から、(1)文献画像伝送システムの利用向上策及び(2)新国立大学協会（仮称）との関係について報告が行われた。また、協議事項として、(1)法人化後の附属図書館組織のあり方について、(2)大学の授業と密接に連携した学生用図書整備及び新たなサービスのあり方について、(3)今後の国立七大学附属図書館協議会のあり方について、の3点があげられ、様々な観点から議論が行われた。

法人化後の附属図書館組織のあり方に関連しては、館長会議及び部長会議の議論を踏まえて、図書館の財政基盤・組織活性化策や、事務組織の再編と学術情報基盤のための組織のあり方、平成17年以降の図書館職員の採用試験と今後の研修制度などについて、活発な議論が行われた。また、学生用図書の整備については、各大学の整備の努力や不十分な財政的基礎などについて率直な報告があり、今後の学生サービスの充実に向けた経営努力に関して真摯な討議が行われた。

(附属図書館)



「シーボルトの21世紀」展関連講演会の開催について

総合研究博物館で現在開催されている国際共同展示「シーボルトの21世紀」展に関連する第1回目の講演会が、10月15日（水）に同館で開催された。

講演者は今回の展示を企画した総合研究博物館教官の大場教授をはじめ、オランダ国立自然史博物館のW. プリンツ博士や獨協大学の加藤僖重教授であった。

シーボルトが収集した日本の自然物等がヨーロッパや世界に与えた影響とその意義、21世紀への教訓など、多様な視点から考察していった。

60人を超える参加者は皆一同に、シーボルトの日本に対する探究心や功績に驚嘆と感心を示していた。

なお、第2回は11月28日（金）に予定している。詳しくは下記とおり。

第2回「シーボルトの21世紀」展関連講演会

日 時：11月28日（金）

場 所：総合研究博物館展示ルーム1階講義室

講演時間：10：00～16：00（途中休憩あり）

講演者：・P. バース

（オランダ：ライデン大学教授）

・D. E. ボーフォード

（ハーバード大学植物標本館副館長、総合研究博物館客員教授）

・塚谷 裕一

（岡崎国立共同研究機構・総合バイオサイエンスセンター・基礎生物学研究所助教授）

・大場 秀章

（総合研究博物館教授）

入 場 料：無料（事前申し込み等は必要なし）



講演の様子

(総合研究博物館)

平成15年度総合研究博物館公開講座「シーボルトの21世紀」開催される

総合研究博物館では10月27日(月)から10月31日(金)まで(毎回17:30~19:30、全5回)、下記のとおり特別展「シーボルトの21世紀」展に連動した公開講座が開催されました。

- 第1回 「シーボルトの使命と事跡」
大場秀章(総合研究博物館教授)
- 第2回 「鉱物のシーボルディアナ」
田賀井篤平(総合研究博物館教授)
- 第3回 「シーボルトと日本の文化」
大場秀章(総合研究博物館教授)
- 第4回 「植物のシーボルディアナ」
加藤億重(獨協大学教授)
- 第5回 「21世紀の学術探検とその意義：シーボルトに学ぶ」
大場秀章(総合研究博物館教授)

講座参加者からは、「シーボルトや彼を囲む人々の残した標本を通して、シーボルトの活動や人物像を確認することができた」、「シーボルトに興味があったが、なかなか独学で学ぶことができなかつたのでとても良い機会になった」等の感想がありました。また、講師の解説を聞きながらの展示見学は参加者に「とてもわかりやすかつた」と好評を得ました。

《展示情報》

特別展示「シーボルトの21世紀」展
会 期：10月4日(土)~12月7日(日)
場 所：総合研究博物館1階展示ルーム
開館時間：10:00~17:00(入館は16:30まで)
休 館 日：毎週月曜日(月曜日が祝日にあたる場合は開館、翌日火曜日が休館)
入 館 料：無料
問い合わせ先：03-5777-8600(ハローダイヤル)
ホームページ：<http://www.um.u-tokyo.ac.jp/>



講義を行う大場教授

(総合研究博物館)

≡ 掲示板 ≡

東京大学/ILOノーベル平和賞社会政策シンポジウム「グローバル化と仕事の未来」

ILOのノーベル平和賞受賞基金により1993年以来世界の主要大学で行われてきている社会政策シンポジウムを、本年12月1~3日に東京大学とILO(国際労働機関)の共催で下記のとおり開催します。ロナルド・ドーア教授(ロンドン大学)を基調報告者に、各国の代表的社会科学研究者をパネリストに迎え、「グローバル化と仕事の未来」をテーマに4つのセッションとラウンド・テーブルを行います。学生、大学院生、教員をはじめ本学関係者の皆さんの参加を歓迎します。

日 時：12月1日(月)~3日(水)
会 場：山上会館2階大会議室
使用言語：英語・日本語(同時通訳付)
参 加 費：無料
問い合わせ先：ILO駐日事務所03-5467-2701

- 12月1日(月)
- 10:00~10:30 開会式
- 10:30~12:00 第1セッション：基調講演「21世紀における仕事の痛みと報い」
ロナルド・ドーア(ロンドン大学)
- 14:00~17:00 第2セッション：「労働市場の柔軟性：その意味するもの」
講演：ロナルド・ドーア(ロンドン大学)
パネル：スーザン・ハウスマン(アップジョン・インスティテュート)、フランソワ・ゴージェ(パリ第一大学)、ジョーヒー・リー(韓国労働研究機構)／コメンテーター：佐藤博樹(東京大学社会科学研究所)、中窪裕也(千葉大学)
- 12月2日(火)
- 9:30~12:30 第3セッション：「社会変化の行方」
講演：ロナルド・ドーア(ロンドン大学)
パネル：アン・ヌムハウザー=ヘニング(レント大学)、小畑史子(京都大学)、矢野真和(東京大学教育学部)／コメンテーター：玄田有史(東京大学社会科学研究所)、水町勇一郎(東北大学)
- 14:00~17:00 第4セッション：「グローバル市場と各国の雇用システム」
講演：ロナルド・ドーア(ロンドン大学)
パネル：マンフレッド・ヴァイス(フランクフルト大学)、アリス・アッコルネロ(ローマ大学)、山川隆一(筑波大

学) / コメンテーター: 中馬宏之 (一橋大学)、中村圭介 (東京大学社会科学研究所)

12月3日(水)

9:30~12:30 ラウンドテーブル: 「グローバル化と仕事の未来」

ロナルド・ドーア、長谷川真一 (厚生労働省総括審議官)、加藤裕治 (連合副会長、自動車総連会長)、加藤丈夫 (富士電機会長、日本経団連労使関係委員会共同委員長)、セッション2-4のパネリスト代表

コーディネーター: 堀内光子 (ILO駐日事務所)

総括: 菅野和夫 (東京大学法学部)

(大学院法学政治学研究科・法学部)

「教養学部報」第469 (11月5日) 号の発行 ——教官による、学生のための学内新聞——

中村 雄祐: 駒場でオープンキャンパス開催

松岡 心平: 古代のシャーマンよみがえる
世阿弥能「箱崎」の復曲

松田 良一: 学問への想いは高校生たちに伝わったか?
教養学部主催「高校生のための土曜特別講座」終了報告

白井隆一郎: DESKの現在

長谷川寿一: 21世紀COE「心とことば——進化認知科学的展開」文理融合の新しい統合人間科学を目指して

楠岡 成雄: 21世紀COEプログラム
科学技術を支える数学新展開拠点

〈時に沿って〉

秋元健太郎: 駒場と渋谷のあいだで

真船 文隆: 18年ぶりに

欄屋 光男: 駒場に舞い戻る

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学生課ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。

(大学院総合文化研究科・教養学部)

教養学部美術博物館のお知らせ

色の音楽 手の幸福

——ロラン・バルトのデッサン展——

Musique des couleurs, bonheur de la main

- des dessins de Roland Barthes -

フランス、ポンピドゥーセンター所蔵のロラン・バルトのデッサン約50点を展示。バルトのテキストの抜粋と合わせて展示することで、死後23年経った戦後フランス思想の《星》の内的世界を浮かび上がらせる。バルトの「サイ・トゥオンブリ論」原稿、その他の貴重な資料も展示予定。

会期: 開館日: 11月27日(木) ~ 12月25日(木)

休館日: 土・日曜日、祝日、大学の定める休日
(11月29・30日、12月13・14日は開館)

時間: 月~金曜日11時から18時まで (12月5・19日金曜日は20時まで開館)

会場: 大学院総合文化研究科・教養学部美術博物館
入場無料

○日本初のバルトに関する国際シンポジウムも合わせて開催し、学術的な解明も行う。

11月28日(金) 18時30分~

東京日仏学院エスパス「イマージュ」(日仏通訳付)

住所: 〒162-8415 東京都新宿区一谷船河原町15

電話: 03-5261-3923

FAX: 03-5261-3927

11月29日(土) 13時~・30日(日) 10時~

東京大学駒場Iキャンパス (仏語のみ、通訳なし)

大学院総合文化研究科・教養学部

関連企画 (くわしくはUTCP (21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」事務室におたずね下さい)

TEL 03-5454-4379

主催: 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部

東京日仏学院

ポンピドゥーセンター・パリ

関西日仏学館

京都大学総合博物館

(大学院総合文化研究科・教養学部)

教養学部で第99回オルガン演奏会の開催 《イギリスオルガン曲の夕べ》

教養学部では、恒例のオルガン演奏会を次のとおり開催いたします。このたびは、アメリカ出身のオルガニストであられるスコット・ショウさんをお招きし、日本では接する機会が少ないイギリスのオルガン曲の数々をたっぷりとお楽しみいただきます。どうぞご期待下さい。

入場は無料です。ホームページを開設しておりますので、ぜひご覧下さい。http://organ.c.u-tokyo.ac.jp

日時 11月27日(木) 18時30分開演
 場所 教養学部900番教室
 曲目 J・クラーク
 デンマーク王子のマーチ
 W・バード
 女王のアルマン、ファンシー
 J・スタンリー
 ヴォランタリー
 M・ケミジ
 オルガン協奏曲第2番
 S・ウェスリー
 ホルズワーシー教会の鐘
 H・ハウウェルズ
 オルガンのための6つの小品より
 A・ホリングス
 トランペット・メヌエット
 オルガン スコット・ショウ

(大学院総合文化研究科・教養学部)

新領域創成科学研究科にトランスレーショナル研究の拠点誕生

ヒトのゲノム情報の決定という金字塔によって、「人類の健康と福祉」にむけた新たなページが開かれようとしています。ゲノム科学などの生命科学の急速な発展を、医科学の分野へと展開する「トランスレーショナルリサーチ」を推進する人材を養成し、医科学の新たな領域開拓の研究を行う専攻として、平成16年4月から新領域創成科学研究科にメディカルゲノム専攻が設置される予定です。

本専攻は、システム医科学大講座とシステム医療科学大講座からなる基幹講座6研究室と2つの協力講座4研究室などから構成されます。ポストゲノム時代のバイオサイエンスを基盤とした医科学を志す多様な個性の参加を歓迎します。

メディカルゲノム専攻入試日程

2003/11/11 学生募集要項配付開始
 医学部1号館1階新領域創成科学研究科教務掛、柏キャンパス生命棟及び基盤棟事務室にて配付
 2003/12/6 入試説明会10:00~15:00
 本郷キャンパス法文2号館2階2番大教室
 2003/12/27~2004/1/6 願書出願受付期間(郵送のみ)
 2004/1/14~16 入学試験(筆記:理学部旧1号館250、350)(口述:柏キャンパス生命棟)
 2004/1/22 合格発表(医学部1号館)
 2004/3/17~19 入学手続(医学部1号館)

問い合わせ先

和田 猛 助教授 wada@k.u-tokyo.ac.jp
 新領域創成科学研究科教務掛 gakumu@k.u-tokyo.ac.jp
 新領域創成科学研究科HP <http://www.k.u-tokyo.ac.jp/>
 メディカルゲノム専攻HP <http://www.k.u-tokyo.ac.jp/mgs/>

(大学院新領域創成科学研究科)

前近代日本の史料遺産プロジェクト 第4回 公開研究集会 「近世編年データベースの構築と今後の課題」

史料編纂所では、文部科学省COEプログラム「前近代日本の史料遺産プロジェクト」の中で、「近世編年データベース」を作成してきました。このデータベースは、本所の中心的な出版物である『大日本史料』にかわるもので、江戸時代1603年以降の史料を網羅したものです。今回はこの「近世編年データベース」を紹介するとともに、意見交換を行い、今後の構築の参考とさせて頂くため、下記のとおり公開研究集会を開催いたします。

日時: 12月5日(金) 13時~17時30分

場所: 史料編纂所 2階 大会議室

報告: ○近年編年データベースの紹介と全体像

山本博文(史料編纂所)

○近世幕府記録類の系統とデータベース化

小宮木代良(史料編纂所)

○史料稿本と近世公家史料

松澤克行(史料編纂所)

○史料編纂所出版物とデータベース

横山伊徳(史料編纂所)

○コメント(予定) 藤井譲治(京都大学大学院)

大野瑞男(元東洋大学副学長)

平川 新(東北大学大学院)

連絡先: 史料編纂所 近世史料部門 教授 山本博文

TEL: 03-5841-5976

E-mail: yamamoto@hi.u-tokyo.ac.jp

(史料編纂所)

平成15年度第4回バイオシーズ・マッチング会 ／ 第19回分生研バイオテクノロジー懇談会

分子細胞生物学研究所では、「平成15年度第4回バイオシーズ・マッチング会／第19回分生研バイオテクノロジー懇談会」を以下のとおり開催いたします。(参加無料)

日 時：11月25日（火） 13時30分～17時00分頃
会 場：弥生講堂・一条ホール
テーマ：バイオテクノロジーの最先端

プログラム

- 13:30 開会挨拶
13:40 豊島 近： 膜蛋白質構造研究の最先端
13:55 橋本祐一： レチノイドとサリドマイドをリ
ードにした創薬研究
14:10 宮島 篤： 幹細胞研究の医療への応用
14:25 加藤茂明： 細胞核内の情報伝達による遺伝
子発現制御機構
14:40 秋山 徹： 癌化のシグナル伝達と分子標的
治療
14:55 鶴尾 隆： 分子標的薬剤のトランスレーシ
ョナルリサーチ
15:10： 産学連携についての取り組み、窓口紹介につ
いて
15:20： ポスターセッション及び交流会～
（於：弥生講堂会議室）
ラボ見学（コース別・3分野）
17:00： 終了予定

問い合わせ先：分子細胞生物学研究所 庶務掛
電話 03-5841-7812

（分子細胞生物学研究所）

教育用計算機システムの更新について

情報基盤センターでは、教育用計算機システムを平成15年3月に更新する。更新後のシステムでは、情報処理教育およびプログラミング教育用にiMac (Mac OS X)、WindowsかLinuxを使う講義用にディスクレスWindows/Linux機 (MintWaveVID) が端末となる。どちらの端末もネットワークからブートして起動し、端末のUSBやCD-RW/DVD-ROM (一部) が利用できる。

ファイルサーバは容量を拡大するとともに、WebDAVプロトコルによりECCS外のPCからの利用が便利になる。講義用サーバ、ユーザ情報発信サーバとWebPARKなどのウェブサーバ、SolarisサーバとXserveサーバなどのOS環境も用意する。更に、Windowsサーバを用意するので、iMacからWindows用のSASを利用することもできる。

プリンターは利用者の自己負担のもとで必要なだけ印刷できるプリペイドカード課金方式を採用する。

メールサーバは教育用とメールホスティング用を用意し、ウェブメール、ウイルススキャン、SPAMフィルターなどを備える。

ネットワークでは本郷と駒場間の接続が1 Gbpsとなるとともに、ファイアーウォールと侵入検出システム

(IDS) を導入する。また、1000セッションが可能なストリーミングサーバも導入する。

ソフトウェアでは、プログラミング言語環境 (GCC, Java言語環境)、SAS, Mathematica, AutoCAD 2004, 3ds max 6, MS-Office, Photoshop Elements, Adobe Acrobat, UNIX系フリーソフトウェアを導入する。なお、SAS (Window版) とMathematicaについてはサイトライセンスを取得予定であり、全学へのライセンス配布 (負担金あり) を予定している。

本件の詳細は<http://www.ecc.u-tokyo.ac.jp/>で広報しているが、問い合わせは ecc-support@ecc.u-tokyo.ac.jp (内線23004) で受け付けている。

この教育計算機環境の整備にともない、講義での映像教材やウェブ教材などの利用環境が調うが、教材の作成支援については ellearn-support@itc.u-tokyo.ac.jp (内線23002) で受け付けている。

(情報基盤センター)

≡ 広報委員会 ≡

(掲載例)

東京大学の法人化に関するQ & A

東京大学の法人化に関する質問を募集します。

来年4月より、国立大学は国立大学法人に移行することになっており、東京大学においてもその準備がUT21会議の法人化委員会において現在積極的に進められています。

しかしながら、法人化後の組織、運営方法、勤務形態、待遇及び経理の方法等どのような変わるのか、また、学生諸君にとっては入学料、授業料はどうなるのかなど、本学構成員の方々には疑問がたくさんあることと思います。

そこで、このたび来年3月までの間、学内広報に「東京大学の法人化に関するQ & A」のコーナーを設けることになりました。普段、みなさんが抱えている法人化に関する疑問がございましたら、ぜひ質問をお寄せください。

詳細は、下記のとおりですので、多くの方から質問をお待ちしております。

記

- 募集内容 「東京大学の法人化に関する質問」
 募集期間 平成15年11月～平成16年2月末日まで
 応募方法 所属、氏名、質問内容、連絡先を必ず記載のうえ、電子メール又はFAXにより広報室あてにご送付ください。なお、質問の掲載については、質問者の氏名を併せて記載いたしますので、匿名希望の方は必ずその旨ご記載ください。
- 備考 必ずしも全ての質問にお答えすることができない場合がありますので、何卒ご了承ください。
- 宛先 東京大学事務局総務部総務課広報室
 内線：22031、82032
 FAX：3816-3913
 E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

Q： 国立大学が法人化すると、学生にとっては何が良くなるのでしょうか。

A： 法人化すると、組織・予算面での自由度が大きくなりますから、各大学の判断で、学生や社会のニーズを踏まえながら弾力的に学科を編成したり、様々な履修コースの工夫などができるようになります。また、法人化後は定期的に評価を受けることになり、その中で、学生による授業評価は重要なポイントの一つとなってきます。したがって、各大学は学生による授業評価等を踏まえながら、今以上に授業内容を充実させたり、授業のやり方を色々と工夫していくものと思います。

さらに、進路選択の相談などの学生サービスについては、今回の国立大学法人法の中に、国立大学の行うべき業務であることをはっきりと書くことにしました。このため、法人化を機に、各大学が学生サービスの重要性を改めて認識して、これまで以上に学生の視点にたって運営が行われるようになって考えています。

Q： 国立大学が法人化すると、授業料が大幅に上がってしまいませんか。

A： 学生の経済状況に左右されない進学機会を提供するという国立大学の役割は、法人化後も変わらず重要なことだと考えています。一方で、法人化の目的の一つは、大学が自分で色々決められるようにしようとするものですから、例えば、大学が特別の教育サービスの提供などを行えるようにするのも大切なことです。

このため、国が現在（平成15年度）の授業料の額を基準となる額（標準額）として法令で定めた上で、各大学で授業料を定めることのようにしています。

また、各大学が様々な工夫を凝らして学生に特別の教育サービスを提供したいなどの理由がある場合には、標準額を超えて授業料を定めることも可能ですが、その場合でも標準額の10%までという上限を法令で定めることとしており、大幅に上がることはありません。

(以上文部科学省ホームページより
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/houjin/index.htm)

(広報委員会)

経理部主計課財務企画室が作成したホームページ「法人化における財務会計に関するQ & A」が下記URLに掲載されていますので、ご活用ください。(学外からの閲覧はできません)

<http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/gakunai/keiri/zaimu/index.htm>

≡ 事務連絡 ≡

人 事 異 動 (教 官)

発令年月日	氏 名	異動内容 (新官職)	旧 (現) 官職等
15. 10. 18	菊 地 正 幸	(死 亡) 平成15年10月18日死亡	地震研究所附属地震予知情報センター地震発生機構論分野教授
15. 11. 1	神 保 泰 彦	(採 用) 大学院工学系研究科助教授	NTT物性科学基礎研究所主任研究員
15. 10. 16	牛 田 多加志	(昇 任) 大学院医学系研究科附属疾患生命工学センター教授	大学院工学系研究科助教授
〃	石 田 哲 也	大学院工学系研究科助教授	大学院工学系研究科講師
〃	新 野 宏	海洋研究所教授	海洋研究所助教授
15. 11. 1	宮 田 哲 郎	大学院医学系研究科外科学専攻臓器病態外科学講座血管外科学分野助教授	医学部講師
〃	武 市 祥 司	大学院工学系研究科助教授	大学院工学系研究科助手
〃	中 井 謙 太	医科学研究所附属ヒトゲノム解析センター教授	医科学研究所附属ヒトゲノム解析センター助教授
〃	古 関 潤 一	生産技術研究所教授	生産技術研究所助教授
〃	興 信次郎	生産技術研究所助教授	生産技術研究所講師
〃	安 田 直 樹	宇宙線研究所助教授	国立天文台天文学データ解析計算センター助手
〃	竹 川 暢 之	先端科学技術研究センター助教授	先端科学技術研究センター助手
15. 11. 1	酒 井 康 行	(配 置 換) 大学院医学系研究科附属疾患生命工学センター助教授	生産技術研究所助教授
15. 11. 1	室 伏 擴	(転 出) 山口大学理学部教授	大学院理学系研究科助教授
〃	五十嵐 丈 二	東北大学大学院理学研究科附属地震・噴火予知研究観測センター教授	大学院理学系研究科附属地殻化学実験施設助教授
15. 10. 16	久 保 哲 夫	(転 任) 大学院工学系研究科教授	名古屋工業大学大学院工学研究科教授
15. 11. 1	蒲 生 俊 敬	海洋研究所教授	北海道大学大学院理学研究科教授
15. 11. 1	大 原 誠 資	(併 任) 大学院農学生命科学研究科教授	独立行政法人森林総合研究所職員
〃	鍋 谷 浩 志	大学院農学生命科学研究科助教授	独立行政法人食品総合研究所職員

人 事 異 動 (事 務 官)

発令年月日	氏 名	異動内容 (新官職)	旧 (現) 官職等
15. 11. 1	新 川 恭 弘	医学部附属病院総務課庶務掛長	医学部附属病院総務課広報渉外掛長
〃	末 武 伸 往	医学部附属病院総務課広報渉外掛長 (併) 医学部附属病院医療サービス課リスクマネジメント掛長	医学部附属病院総務課庶務掛長

≡ 訃報 ≡

芦原 義信 名誉教授

本学名誉教授芦原義信先生は9月24日（水）午前6時12分に逝去されました。享年85歳でした。

芦原先生は東京四谷でお生まれになり、本学建築学科を昭和17年に卒業されました。終戦後の昭和27年には、ハーバード大学建築学部へ留学され、さらにロックフェラー財団の奨学金を得て世界の都市を巡られました。

芦原先生は、芸術的にも科学的にも、建築を単体としてではなく、建築を周辺の環境と一体的に扱われました。この考え方は、帰国後最初に設計され日本建築学会賞作品賞を受賞された中央公論ビル（1956）に表れ、続くソニービル（1966）、駒沢公園体育館・管制塔（1964）、モントリオール万国博・日本館（1967）、本郷構内の東京大学御殿下記念館（1976）、第一勧銀本店（1981）、国立歴史民族博物館（1983）などの代表作全てで展開されています。また、このような考え方を、理論的に、かつ分かりやすくまとめられたのが『街並みの美学』でした。



この本は以降の都市計画行政、建築設計に絶大な影響を与えました。

教育者としての経歴も長く、かつ広く、国内外にわたりますが、本学では建築意匠講座の初代教授として1970年から10年間教鞭を執られ、本学の建築教育に新風を吹き込まれました。また、建築、芸術関連の多数の学協会で指導的立場も歴任されました。

こうした功績に対して1998年には文化勲章が授けられています。

先生は、常に建築のすばらしさを説かれ、都市空間の大切さを訴えられて日本の建築界の質の向上に多大な貢献をされましたが、決して理念的ではなく、あくまでも具体的で、実践を以て示されました。

つい、このあいだまで元気なお姿に接していた者にとっては突然の訃報であり、闊達でユーモアに溢れるスピーチが聞けなくなるかと思うとまことに残念で仕方がありません。ここに生前のご功績とお人柄を偲び、衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

（大学院工学系研究科・工学部）

菊地 正幸 教授

本学教授、菊地正幸先生は去る10月18日（土）、肺炎によりご逝去されました。享年55歳でした。

先生は、昭和45年に東京大学理学部地球物理学科を卒業され、大学院理学系研究科に進学、昭和48年に博士課程を中退後、横浜市立大学文学部に助手として赴任されました。その後、助教授、教授に昇任されました。その間、昭和51年に東京大学より理学博士の学位を取得され、ノースウェスタン大学とカリフォルニア工科大学に留学されました。平成8年7月に東京大学地震研究所地震予知情報センター教授に転任されました。

先生のご研究は、割れ目理論や実験による割れ目理論の検証、震源過程論を中心とする様々な分野にわたっています。近年では特に「リアルタイム地震学」を研究課題とされていました。それは、時々刻々と集まる観測データを即時（リアルタイム）に分析し、的確な地震情報を発信するとともに、地震の発生や強い揺れのメカニズムを解明することによって、地震災害の軽減に貢献しようとする学際的研究です。その先駆的な研究は国際的に高く評価されています。そのもとになった研究は逐次インバージョンによる地震波形解析法の開発でした。この独創的な方法を用いて、大地震の発生メカニズムを詳細に解析し、地震時に大きく動くアスペリティの存在を通して運動の不均質性を解明されていきました。大地震が発生したときには直ちに解析した震源やメカニズムが



「EIC地震学ノート」として公表されました。それは研究者ばかりでなく防災機関やマスコミからも注目されてきました。

学外の活動もめざましく、中央防災会議防災基本計画専門調査会（内閣府）、地震学研究連絡委員会（日本学術会議）、測地学審議会地震火山部会地震予知特別委員会（文部省）、地震調査研究推進本部地震調査委員会（文部科学省）、地震予知連絡会（国土地理院）、ナウキャスト地震情報検討委員会（気象庁）などを務められ、学識経験者としても地震学の発展と地震防災の推進に大きな貢献を果たされてきました。地震研究所では、地震予知情報センター長、所長補佐、将来計画委員会委員長、地震予知研究協議会計画部会部会長などの重責を果たされました。

先生は、温厚で誠実なお人柄から、大学の教官や学生の信望が厚かったばかりでなく、国内や国外の関係者からも信頼を一身に受けておられました。とりわけ大学においては、まれにみる包容力をもって後進の指導にあたられました。難解な数式の意味を平易に解説するという能力は学生時代から抜群でした。日本酒をこよなく愛し、プロ野球の熱烈なファンという一面もおもちでした。

卓越した業績に加え、これからさらに大きな成果を生みだして行かれようという矢先のご逝去で、志半ばにして逝かれたことは、学界においても計り知れぬほどの損失であります。

ここに先生のご生前のご功績とお人柄を偲び、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（地震研究所）

“淡青”から考えた事

原稿執筆をお引き受けして、最初に考えたのは“淡青”の由来でした。いろいろと考えていたのですが、最近になり、この由来が広報誌「淡青」の表紙裏に書かれてあるのに気が付きました（私は、今年の4月に他大学から移って来ました）。その説明を読むと格別な意味が無いように思われますが、ここでは、この言葉から連想された事について書いてみたいと思います。

淡い色というのは、私が考える日本文化を象徴しています。淡い色の中に微妙な変化を見いだす繊細さ、また、白・黒をはっきりさせない、曖昧さ、あるいは、一種のやさしさなどが連想されます。しかし、最近の周囲を見まわすと、いたる所に原色がはびこっているように思えます。これは、計算機等の発達によるデジタル化や、昔の風土の消滅（減少）に関係しているように思われます。例えば、デジタル化により作られたアニメには淡さはほとんど無く、くっきりした線や原色があふれています（宮崎アニメ



は別ですが)。このような社会環境で育った若い人たち、あるいは我々さえもが（考えも風貌も）原色志向になるのは、当然かもしれませぬ。

文化や価値観が時代により変化するの、やむ負えない事と思います。この事は、どのような文化や価値観も絶対に良い／悪いと言えないという事だと思っています。このような状況で各世代が果たす役割は何でしょうか？私の考えでは、他の世代（特に次世代）に迎合するのではなく、自分たちの世

代の文化／価値観を主張し続ける事ではないかと思えます（ただし、力で押し付けない）。主張する事は賛成する／反対するとか、従う／従わないとは別の事であり（この混同が往々にしてあるようです）。主張し続ける事により、我々の次の世代に少しは何か（いい物？）が残せるような気がします。みんな一斉に渡る（変わる）のではなく（みんな一斉に交通事故にあう可能性があります）、遅れる人や渡らない人が少しはいてもいいような気がします...

（地震研究所 本多 了）

（淡青評論は、学内の職員の方々にお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

◇広報室からのお知らせ

平成15年度「学内広報」の発行日及び原稿締切日を、東京大学のホームページに掲載しました。

URL: <http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/soumu/soumu/kouhou.htm>

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務課広報室を通じて行ってください。

No 1274

2003年11月12日

東京大学広報委員会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学総務課広報室 ☎ (3811) 3393

e-mail kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

ホームページ <http://www.u-tokyo.ac.jp/jpn/index-j.html>